

祝

2012年12月 博士号(法学)取得

池上萬奈さん

【論文テーマ】第一次石油危機と日本外交―資源政策における日米関係と多国間協調―
来春から母校慶應大学での講義もスタート

2012年12月、博士号取得支援事業の助成対象者の中から初めて、博士号を取得したとのおいしい報告が飛び込んできた。2011年度秋季応募で、国際政治学を研究する池上萬奈さんだ。

博士号論文「第一次石油危機と日本外交―資源政策における日米関係と多国間協調―」が認められ、慶應義塾大学より法学博士を授与された。

現在は、同大学大学院法学研究科の助教として、論文の指導教授でもある添谷芳秀教授のもとで研究を継続中。秋には日本国際政治学会で「日本外交の課題」と題した研究発表をする予定だ。さらに、来年4月からは日吉キャンパスの2年生を対象とした「国際政治」の教壇に立つことも予定されている。

「私の売りは最高齢の新米助教。若者が一人でも多く、国際情勢に目を向けてくれるよう、興味を持たれる授業を目指します」と意欲的。

■小学生にキューバ危機を考えさせる家庭

博士号に挑戦する池上さんに影響を受けたのか、友人の何人かが大学の公開講座などを受講し始めたという。家庭の母親であっても、子どもたちと世界の動きを語れる女性であってほしいと願う。

「そういうえば子どものころ、私の父が新聞記事に赤線を引き、この記事を読んでおきなさいと言って出かけ、夜戻ってからそれについて意見を言わせられました。最初は私が小学校4年生のときで、キューバ危機の記事でした。そうした影響もあって、国際政治や外交に興味を持つと同時に、学校の勉強以外のことを学んだり、家庭で話したりすることに

も積極的になったのかもしれない」

■子どもたちの勉強する姿を見て学び直し

現役慶大生だったころの池上さんは、日本一になるほど競技ダンスに熱中し、専攻していた西洋史の研究は二の次だったそう。保険代理店を経営しながら3人の子育てをしてきたが、子どもが勉強をする姿に触発され、自分もちゃんと学び直したいと思ったのが、博士号に挑戦するきっかけだった。

学び直しを始めたのは52歳。通信学部2年、修士課程2年とぎて博士後期課程に臨んだ。最初の論文や研究発表はまずまず好評だったが、博士論文を書く許可はそう簡単には得られず、4年9か月かけての取得となった。

研究にあたっては、外務省、通産省、資源エネルギー庁のOBたちにインタビューを敢行し、中心人

物には10回以上話を聞いた。また、アメリカの公文書館に約2週間、毎日12時間ほど通い詰めたこともある。そうした中で明らかになった、第一次石油危機後の日本の資源外交における新しい事実が、池上さんの論文の柱となっている。

アラブの産油国は、日本がイスラエル非難をすることを、日本向け原油輸出削減解除の条件とした。それを呑まないよう迫るアメリカ。その板挟みの中、通説では、日本はアメリカの警告に従わない苦渋の決断をし、経済援助と引き換えに石油確保に動いたと言われている。しかし、今回の研究により、日本はアメリカと事前交渉のうえ、アラブとアメリカの要求を同時に満たすイスラエル非難声明を作成していたことがわかった。多国間協調を保ちながらエネルギー安全保障を確立しようとした、当時の資源外交の深部を明らかにしている。

■財団の支援がとても励みになりました

現在の日本を取り巻く国際情勢やその対応をどう思うか、池上さんに聞いてみた。

「国際政治学は、戦争を起こさないための学問なんです。平和という理想をめざすには、現実の政策や現場の交渉が重要です。学問としては、公文書が公開される30年前までしか検証できませんが、現在を語るために常に歴史を学ぶことは欠かせません。今は、もう少し地球儀を俯瞰して見る、そんな視点が必要なのではと感じます」とのこと。

「好きで研究しているとはいえ、それを理解してくれる、しかも50歳以上を支援してくれる制度というのは、本当にうれしいし、励みになりました。指導教授が自分より年下だったり、キャンパスで学生時代の後輩を見かけて声をかけると、偉い教授になつていたりしますが、それもまた楽しいです」



「医学博士を目指す息子と競っていたが、2年先行されてしまった」と、いきいきとした表情で話す池上さん